第 37 年 会 を 顧 み て*

白 戸 紋 平**・佐 田 栄 三**

第 37 年会の運営

第37年会では「より有意義な年会」を目指して、いくつかの改善の努力が払われ、またそれがこの年会を特徴付けているともいえるので、第37年会の企画、準備など運営について概略述べてみたい。

昨年7月に行なわれた年会等委員会において、昭和47年度以降の年会、秋季大会および総合シンポジウムの開催担当支部の決定がなされた。従来、年会は東京（関東支部）か京都・大阪（関西支部）に開催地が限られていたのを東海支部をも加えて、3支部間にこれらの本部行事を輪番とした。第37年会が従来と異なる最も大きい点の一つは開催地にあるということができる。第2の特徴は、従来とかく年会が講演者、研究発表者中心

に流れていたのを、少しでも会員中心、参加者中心に改めようとした点にある。特別講演、研究発表、展望、技術報告など年会の諸行事にこれらの点をいかに織込んだかを順に述べよう。これらはすべて、前述の年会等委員会の決定に基づいて、東海支部幹事を中心に編成された第37年会準備委員会の努力に負っている。

1) 研究発表 研究発表をいかに有意義なものにする

参加者は登録を済ませ三々五々会場に散っていく

* 昭和47年5月8日受理

** Mompei Shirato（東海支部長）Eizo Sada（東海副支部長）名古屋大学工学部化学工学教室

各会場では熱心な発表と討論が行なわれた

るかはこれまで種々な機会に論ぜられてきた。さきに述べた年会等委員会においても、まず手近に可能なことから着手しようということで「講演発表者の手引」を作成することとなり、数回の討議のうえ立案したのが本誌36巻2号176頁に記載のものである。手引の内容は研究発表者が自己の研究を参加者に十分理解して貰うと同時に討議に参加して貰うために当然な注意事項であって、講演時間内に「参加者が十分理解できる程度の量と内容」にし、前刷を読むような講演の仕方は不適当である、図表の数を10枚以内とし、1枚には図なら一つ、文字ならば10行以内に大きく書くことなどを要求している。このような「講演発表者の手引」を2月末までに発表者全員に送付し、その主旨を徹底するようにした。

2) 座長 さきの年会等委員会において、従来の座長の受持ち時間は講演が約3件で1時間程度であり、小間切れの感じが大きいので、もう少し長くまとまりのあるセッションにならないかという意見がでた。準備委員会では、座長2人制とし、受持ち時間を大幅に増して2~3時間とする案を検討した。応募講演のテーマによってはセッションのまとまりが付かない場合もある恐れがあったが、2人の座長により何とか切り抜けて貰うこととした。座長に対しては事前に「座長手引」および「講演者紹介資料」を送付した。「講演者紹介資料」は講演者および共同研究者の簡単な経歴とその研究発表のオリジナリティおよび工学的価値を講演者に明記させたもので、セッションを始めるに際しての紹介資料とした。また「座長手引」は参加者全員が発表の内容をよりよく理解し、より有意義な討論の場を得るよう座長に対する注意事項で、セッションの時間の割り振りを示すとともに、セッションを円滑に運営するための基本的ルール、セッションを盛り上げるための準備などを述べている。

3) 特別講演・展望 今回は特別講演5件としテーマも「プラント輸出」「環境保全」のような参加者に関心の深い問題を選定した。また地元の躍進産業である自動車工業と化学技術との関連についての特別講演のほか専門分野に関する特別講演2件が行なわれた。展望は第3回秋季大会より取入れられているが、年会で行なわ

れたのは始めてであり、3テーマについて行なわれた。

4) 技術報告 従来とはやや趣を異にし、三つのテーマ、すなわちプロセス開発、脱臭技術および工業廃水について、各専門技術者の3~4講演を中心に討議する形式をとった。

5) その他 準備委員会において、広報活動の重要性が指摘され、従来の会告およびポスターに加えてパンフレットを作成した。ポスターにはバックに名古屋市の青年の像を配した。パンフレットはその様式をほぼA. I. Ch. E. に準じたが、講演内容の紹介は行なっていない。サイズは上着ポケットに容易に入れうる程度のものでした。表紙には名古屋大学東山キャンパスの航空写真を配した。ポスター、パンフレットともに本年の会誌の表紙の薄紫色に統一した。セッション会場数は昨年の7会場に対して2会場増した。会場数の増加はそれだけ並列して進行する講演が多く、参加者の希望する講演を聞けない場合も多くなるが、特別講演・展望を増し、また243件という多数の応募研究発表を時間的余裕を持たせて配列するためにはやむを得なかった。

第37年会の印象

3月上旬からの天候不順はすっかり安定し、会期中は晴のち曇の天候であった。キャンパスの桜も3~4分咲きで、ほぼ恵まれた環境といえる。予約申込者900名および当日申込者250名で盛況に終始した。

5件の特別講演はいずれも盛会で会場によってはかなりの人が立ったまま聴かねばならなかった。内藤雅喜氏の講演は波乱に満ちた世界経済の中でプラント輸出をい

特別講演「これからのプラント輸出とその問題点」
東洋エンジニアリング(株)社長 内藤雅喜氏
(4月3日13時、於特別会場)

4月4日11時から職員食堂にて評議員会が開催され、46年度会務・決算報告、47年度予算などが可決承認された(演壇は開会に先立ち挨拶する山本会長)

総会席上名誉会員推薦式が行なわれ、前会長原田珍重氏に授与された

かに考えてゆくかを示した。水科薦郎氏は長年研鑽された分野について感銘深い講演を行なった。総会終了後に梅原半二氏の講演があり、自動車工業に対する化学技術の寄与、自動車公害などの問題について示した。河野良二郎氏は鋳物工業と化学工学との関連について解説した。また小野英男氏は最近とくに問題となっている産業廃水処理について種々な資料をあげて示した。

展望は1日1テーマのわりで、関連したセッションの冒頭で行なわれた。田中達夫氏の「粉碎速度」、高松武一郎氏の「反応操作の最適化と感度解析」および明昌高司氏の「気液系反応装置」である。いずれも豊富な研究資料に基づくレビューで、単なる羅列に終わることなく、各研究の位置付け、意義を明確に示した。

研究発表は会期中3日にわたり、7会場、31セッションで活発に行なわれた。必ずしもまとまったセッションといえないものもあったが、座長の努力により研究発表の展望、講演者の紹介、研究発表および討論が行なわれ、セッションの終りに総括がなされた。セッションの運営は座長によって異なるが、研究発表に先立って、その研究発表の位置付け、意義などを詳しく解説したセッションもあった。しかし、あるセッションでは研究発表に時間を取られ、十分な討論を行ない得ないものもあった。

技術報告は1日1テーマで3件、プロセス開発、脱臭技術および工業廃水処理である。レビュー講演および話題提供の講演を3~4件行ない、これに関連して討論する形式がとられた。会場は300名収容であるが、常時200名近い参加者があり盛況であった。とくに工業廃水処理のセッションでは熱心な質疑応答が行なわれた。

化学工学教育セッションは4日午後、「Continuing Educationについて」と題して行なわれた。産業界および学会から各2名の話題提供があり、数名のコメンターによる意見が述べられた。興味深い問題で多数の参加者が集まったが、十分な討論をするには時間不足であった。

その他、各2件の論文賞および技術賞受賞記念講演会が総会終了後に2会場で行なわれた。

特別講演「自動車工業における化学技術の重要性」
豊田中央研究所長 梅原半二氏
(4月4日14時、於特別会場)

第37年会の反省

参加者数に関するかぎり、総計約1,150名に達し、年会としてはほぼ満足すべき結果を得たものと考えられる。これは名古屋開催という珍らしさもあるうし、また交通の便利さにも帰因されよう。

年会等委員会および第37年会準備委員会は「より有意義な年会」を目指してさまざまな努力を行なった。しかし、本当に参加者が年会に参加して有意義だったかと問うとき、まだ改善のための第一歩の感が深い。研究発表の形式、前刷、座長、セッションの組み方、展望・総括の仕方、展望講演、技術報告など改善すべき問題が山積している。あるいは、これらの問題は「年会とは何か?」、「年会に参加して有意義とはどういうことか?」など十分討議してはじめて解決される問題かも知れない。

化学工学協会第37年会に関するアンケート

アンケートの回収は118通(年会終了後の郵送分を含む)であり、年会参加者1,150名であるので回収率は10.2%である。

表1には、回答者の年齢および所属を表記した。年代は、20~30代が68.7%、また所属は学校・研究所関係が、67.8%である。参加者名簿から拾った参加者の所属比率は、学校関係57.0%、会社37.6%、研究所5.4%であるから、アンケートの回答は、学校、研究所関係が良く、会社関係の参加者の回答率が悪いが、ほぼ全参加者の意見を代表していると考えることができよう。

つぎに、表2には、所属別に対する参加目的を示した。63.7%が自己の研究・技術の向上のために、何かを求めて年会に参加している意欲がうかがわれる。また、先輩、友人その他の人に会うためと答えた人が6.9%あったことも見逃すことはできない。年会のインターミッション、ミキサーなどで先輩、友人または、同じ専門の人々と歓談するのは、楽しいものであり、見方によっては、年会の一つの重要な側面を表わしている。何によって(ロ)の自己の研究・技術に資したかの質問に対する内訳が表2の下段に示されている。研究発表

41.4%に対して、特別講演、展望、技術報告が47.6%にも達し、量的に研究発表中心に流れやすい年会に対して一つの反省を与える。また友人との個別討論が、8.0%あることは、先輩、友人に会うための目的で参加した6.9%とともに注目される。

表3の上段には、参加者の年代別に対する設問4の結果を示した。研究発表が従前どおり難解であるとの回答が40.3%、わかりやすくなった、または、その傾向が認められるが59.7%である。研究発表に際し、講演の量と内容に配慮し、オリジナリティと工業的価値を明確にしようとする努力がかなり払われてきたことが認められる。研究発表を年会の参加目的としているものが52.4%(=26.0+(63.7)(0.414)、表2参照)であるから、今後ますます、この努力が払われなければならない。表3下段の第37年会で最も有益であった行事の中、研究発表に49.3%の回答を得たのは、幸いであった。

設問(5)~(7)、(9)は、年会の運営に関するもので、表4に一括した。まず座長の受持時間を長くし、展望的紹介、セッションの総括を行なったことに対して、今までより良くなったが57.4%であった。「展望」につい

化学工学協会第37年会に関するアンケート用紙

年会等委員会

化学工学協会は会員各位の年会へのご参加をより有意義にするため、本37年会では種々な新企画を実施しました。すなわち、一般および専門別特別講演5件、展望3件、化工教育セッションならびに3テーマの技術報告会のほかに、「研究発表講演者手引」を制定して参加者全員が理解しやすい講演方法や見やすい図表を準備するよう各研究発表講演者にお願ひしました。

つきましては、参加者各位のご意見を承りさらによりよき大会とするためアンケートにご協力をお願いします。

次の設問に該当する項に○印をつけてください。

(1) あなたのご年齢は

- (イ) 20代 (ロ) 30代 (ハ) 40代
(ニ) 50代 (ホ) 60才以上

(2) あなたの勤務先は

(イ) 会社 (ロ) 学校 (ハ) 研究所 (ニ) その他

(3) 年会に参加した目的は

(イ) 研究発表をするため	{	(i) 研究発表
(ロ) 自分の研究・技術に資するため		(ii) 特別講演、展望
(ハ) 先輩、友人その他の人に会うため		(iii) 技術報告
(ニ) 上司から参加するように言われたから		(iv) 見学会
(ホ) その他		(v) 友人との個別討論

(4) 研究発表が難解であるという反省から講演発表者にはあらかじめ「参加者が十分理解できる程度の講演の量と

内容にしぼる」ことおよび研究内容のオリジナリティとその工業的価値を明確にするようお願いしましたが

- (イ) やはりむずかしい (ロ) わかりやすくなった
(ハ) 今までよりわかりやすくしようとする傾向がみられた

(5) 座長にはその受持時間を長くし、展望的紹介ならびにセッションの総括をお願いしましたが

(イ) 今までより良くなった (ロ) 変りばえがしない

(6) 新しく展望を組み入れましたが

- (イ) 今後も続けるべきだ (ロ) 必要なし
(ハ) どちらでもよい

(7) 技術報告会について

(イ) 興味がある (ロ) 興味なし

(8) 第37年会に参加して最も有益であったのは

- (イ) 研究発表 (ロ) 特別講演 (ハ) 展望
(ニ) 技術報告 (ホ) 見学会 (ヘ) その他

(9) 年会での研究発表方式についてご意見を聞かせ下さい。

- (イ) 現状のままでよい
(ロ) 総合シンポジウムのようにセッション形式がよい
(ハ) その他

(10) その他何でも年会についてのご意見をお書き下さい。

表 1 アンケート回答者の構成 (設問 1, 2)

設問 (1), (2)	会 社	学 校	研 究 所	そ の 他	所属無記載	計 (比率%)
20 代	11	24	3	2	1	41 (34.8)
30 代	13	25	1	1		40 (33.9)
40 代	6	12	4			22 (18.6)
50 代	4	8	1			13 (11.0)
60 歳以上		2				2 (1.7)
計 (比率%)	34 (28.8)	71 (60.2)	9 (7.6)	3 (2.5)	1 (0.9)	118

表 2 年 会 参 加 の 目 的 (設問 3)

設 問 (3)	会 社	学 校	研 究 所	その他	無記載	計 (比率%)
(イ) 研究発表をするため	4	31	2	1		38 (26.0)
(ロ) 研究・技術に資するため	29	51	9	3	1	93 (63.7)
(ハ) 先輩・友人に会うため	2	7	1			10 (6.9)
(ニ) 上司の指示	3	1		1		5 (3.4)
(ホ) その他						
計	38	90	12	5	1	146*
(イ) 研究発表	19	40	6	2		67 (41.4)
(ii) 特別講演、展望	16	26	6	1		49 (30.3)
(iii) 技術報告	15	9	3	1		28 (17.3)
(iv) 見学会	3	2				5 (3.0)
(v) 個別討論	5	8				13 (8.0)
計	58	85	15	4		162

* 表 1 の回答者中会社関係の数と合わないのは 1 人で 2 項以上○印を付したためである (以下同じ)。

て、今後も続けるべきだ 72.3%，必要なし 3.6%，どちらでも良い 24.1% で展望を続けよとの意見が多い。「技術報告会」についても、78.5% の興味があるという回答を得た。さらに研究発表形式について、現状のまま 55.0%，総合シンポジウムのセッション形式 30.3% で、討論の時間が短かすぎたの意見が散見された。

第 37 年会で最も有益であったのはという設問に対して、表 3 の下段の結果が得られた。前述の研究発表 49.3% について、特別講演 16.7%，技術報告 15.3%，展望 13.9% の順で、見学会は、わずか 0.7% にすぎなかった。アンケートの回収が見学会以前に行なわれたことにもよるであろうが、さらには見学会のあり方について考慮されねばならないであろう。

最後に設問 (10) に対して、回答者の内 46 名から、さまざまな約 90 項の意見が寄せられた。いくつかを羅列的に紹介しよう。

総括として、企業の発表を強化してほしい；展示会・映画会なども併催して欲しい；会場が多過ぎる、近いところにとめる；年会と秋季大会の性格を変えて行なう；年会費が高過ぎる、など。

前刷に対して、技術報告、展望の前刷も作る (4)*；

* 数字は意見の数を示す。

前刷の印刷を早くして参加者に配布する；予稿集の締切が早過ぎる；500 字程度の要旨集として、現在のものは後刷集とする；前刷原稿と発表講演の異なるものがあった (2)；使用記号、文献など前刷の様式を整える、など。

研究発表に対して、研究の位置付け、目的をさらに明確にする (3)；前刷があるから討論を主体とする (2)；討論の時間を長くする (4)；プログラムの編成にまとまりがない；専門外のものが聞いてもわかるような方法はとれないものか (2)；図表の位置が不適當 (5)；スライ

4 月 4 日夕方から南部食堂にて参加者全員による
ミキサーが行なわれ、和やかに懇談の実をあげた
(内田前会長の音頭で乾杯。)

表 3

<研究発表> 設問(4)	20代	30代	40代	50代	60歳以上	計(比率%)
(イ) やはりむずかしい	19	15	7	3		44 (40.3)
(ロ) わかりやすくなった	5	2	7	2		16 (14.7)
(ハ) わかりやすくしようとする傾向が みられた	13	23	5	7	1	49 (45.0)
計	37	40	19	12	1	109
<有益な項目> 設問(8)						
(イ) 研 究 発 表	23	27	13	8		71 (49.3)
(ロ) 特 別 講 演	5	11	3	5		24 (16.7)
(ハ) 展 望	4	9	4	3		20 (13.9)
(ニ) 技 術 報 告	6	7	6	2	1	22 (15.3)
(ホ) 見 学 会			1			1 (0.7)
(ヘ) そ の 他	4			1	1	6 (4.1)
計	42	54	27	19	2	144

表 4

<座長> 設問(5)	会 社	学 校	研究所	その他	無記載	計(比率%)
(イ) 今までより良い	19	36	5	2		62 (57.4)
(ロ) 変 わ ら な い	13	29	3	1		46 (42.6)
計	32	65	8	3		108
<展望> 設問(6)						
(イ) 今後も続ける	27	44	7	2	1	81 (72.3)
(ロ) 必 要 な し	1	2	1			4 (3.6)
(ハ) どちらでもよい	4	21	1	1		27 (24.1)
計	32	67	9	3	1	112
<技術報告> 設問(7)						
(イ) 興 味 が あ る	31	42	8	3		84 (78.5)
(ロ) 興 味 な し	2	20	1			23 (21.5)
計	33	62	9	3		107
<研究発表方式> 設問(9)						
(イ) 現 状 で よ い	14	39	5	2		60 (55.0)
(ロ) セッション形式	12	20	1			33 (30.3)
(ハ) そ の 他	8	6	2			16 (14.7)
計	34	65	8	2		109

ドを使用すべきだ(7);講演番号表示の位置が不適当(2),など。

特別講演に対して,時間帯を別にして欲しい。

座長に対して,受持ち時間が長すぎる(3);展望的紹介,総括をするには時間が不足であった;各発表の位置付けを明確にし解説すべきである;1セッションの講演を3~4件にした方がよい,など。

これらの意見の中には,確かにもっともなものもあるが,準備委員の1人として反論したいものもある。しか

し,全体としては,第37年会のいろいろな新しい試みを高く評価しており,今後もこのような企画や改善の努力を続けるべきだとの意見が多かった。たとえば,その中の一つの意見として,「年會を改善してゆこうとする努力の跡は,大いに認められたが,習慣でなかなかうまくいかない面もあるので今後なお一層の努力の積重ねが必要であろう。」というのがあった。年會をより有意義なものとするための地道な努力とその積み重ねが必要であろう。